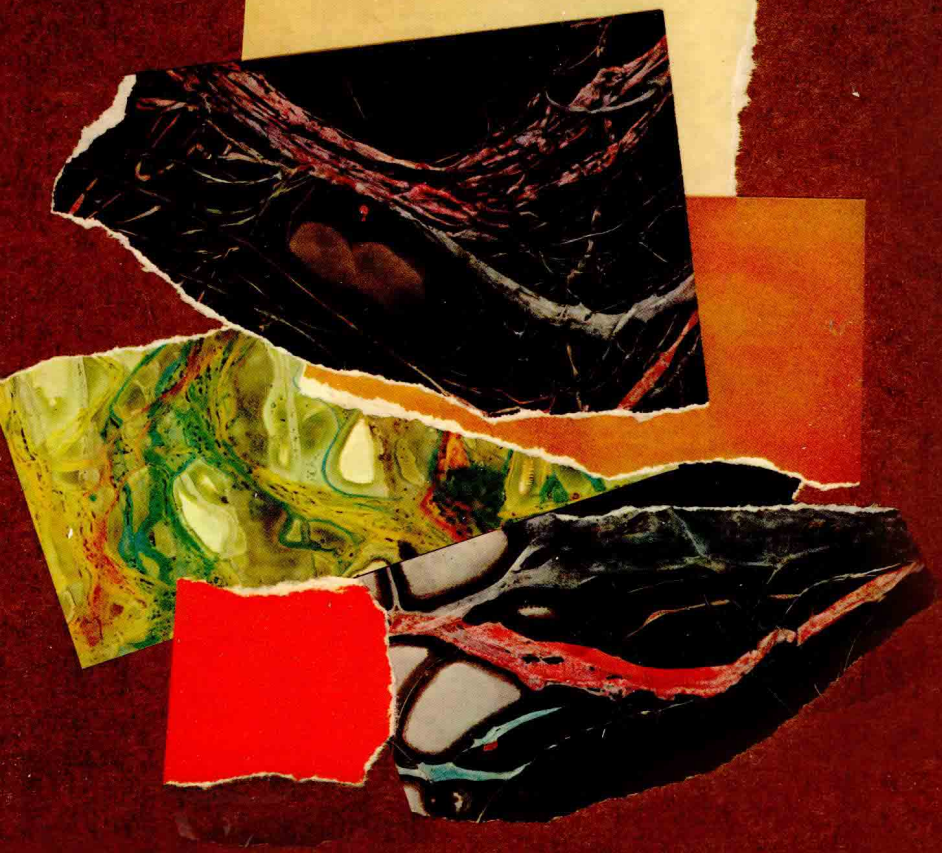
灰色の奇跡

あるガンワクチンの真実

中島みち



灰色の奇跡

あるガンワクチンの真実

中島みち

灰色の奇跡——あるガンワクチンの真実　定価八九〇円
一九七八年二月二十五日　第一刷発行

著者　中島みち

発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二丁目三三　郵便番号一二一
電話東京〇三(九九五)一二一(大代表)　振替東京八一二九二〇
印刷所　慶昌堂印刷株式会社
製本所　株式会社黒岩大光堂
© Michi Nakajima 1978, Printed in Japan
落丁本・乱丁本はおとりかえします（学二）

0093-435376-2253(0)

灰色の奇跡——あるガンワクチンの真実

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

一

《昭和四十五年》

たしかにこの建物が、今、病院の受付で教えられた研究棟のはずであった。

グレイ・グリーンのタイルで粧われた私立中央医科大学付属病院本館の七階建てビルは、初夏の陽光を散乱させて近代的大病院としての面目を保っていたが、その名誉教授で院長も経験した人の部屋が、こんな荒廃した建物の中にあるというのである。

島村真生子は、さっき社を出る時、デスクの北沢から、「ともかく大変なところらしいよ。あの病院はほとんど空襲で焼けてね。松山博士の研究室は火に煽られながら焼け残った部分の、しかも昔のボイラー室だそうだから……」と予備知識を与えられてはいたが、それにしても戦後二十年あまり経た今、ちょっと珍しい眺めであった。外壁は朽木の皮のようにくすぶり、入り口の脇の闊葉樹の葉は、それが生きた植物であることが不思議に思えるほど錆びついていた。

「土足厳禁」と大書した貼り紙がしてあったが、りんご箱に乱雑にほうり込まれた、うす汚れたスリッパの中から、なんとかまともな一対を選び出すのは容易なことではなかった。地下への階段は半間幅の三分の一までを雑然と積み上げた実験器具に占領されていて、三、四段降りると、薬品と動物の尿の入り混ったような得体の知れない臭いが鼻をついた。

階下はいきなり実験室になっていた。いくつかの扇風機がよどんだ熱気をユルユルとかきまわしていた。白い実験衣の下からまともに毛脛を突き出している男たちの姿に気押されて、真生子は黙ったまま、だれに案内を乞うたものかと部屋の中を見回した。

奥の隅の机に向かっている銀髪の人が真生子のほうをちらりと見たが、またすぐ机に向かってしまった。その顔は写真で見覚えのある顔のようでもあり、真生子は近寄り、「あのオ松山先生は……」と声に出してみると、その小柄な人はピクッと飛び上がるように顔を上げ、唇を引きつらせながら真生子を見据えた。そこには癇癖な青年の面影と、人見知りをした幼い子供の怯えのようなものがうかがわれた。

「アッ……わたしィ……松山ですが」

「ああ松山先生、私、三時にお目にかかるお約束をさせていただいた東日の……」

「アッ、アッ、そうでしたか」

ほっと笑顔になって松山瑞穂博士は立ち上がり、島村真生子の名刺の表、裏と丹念に眺めてから、机の脇の古びた布張りのソファに席をすすめた。そして小さく笑った。

「東日新聞の科学部の記者さんがみえるって、まさかあなたのような若いご婦人とは思いませんでした。失礼しました」

パリッと糊付けされた実験衣から、やはり真白なワイシャツがのぞき、ネクタイも結ばれていた。松山博士は汗をかくことのない人のように真生子には見えた。

半世紀も前、この人は紅顔の美少年という言葉がピッタリだったにちがいない。それとも、今で

こそ、つややかな白髪が年相応の非力を感じさせる小造りの整った姿かたちによく合い、みやびとも言えそうな美しさがかもし出されているのであって、若い頃は案外平凡な風貌だったかもしれない。真生子はそんな観察を楽しみながら、挨拶を交した。

実は、先ごろ亡くなったさる大企業の社長が松山瑞穂博士に傾倒していて、東日新聞科学部デスクの北沢は、その実業家に逢うたびに、松山博士に一度逢ってみてくれとすすめられていた。その実業家の身内の婦人は、あと二、三週間しか保たないという末期ガンで、ひどい苦痛を訴えていたのが、松山博士のワクチンを注射してみると、その痛みはうそのように消えたというのである。彼女はまもなく退院して、ドライブなども楽しむほど調子もよくなり、その後一年あまりも生きのびられたということだった。

北沢はどうやら松山ワクチンには気乗り薄のようであったが、厚生行政にも関係のあった、その亡くなった実業家に何度もすすめられていたことでもあり、また実際、今、中央医大にガンの特効薬としての松山ワクチンを求めて患者が集まりはじめているということで、「島村君あたり、暇があったらぼつぼつ追いかけてみるか」と言いだしたのであった。

島村真生子は、東日新聞科学部の紅一点、「三十にもなって今さら〝紅〟でもないでしょう」と自ら売れ残りのハイミスを認めていたが、一方で、入社の時から念願だった科学部に回されたばかりの今、日々の仕事に胸が熱くなるほどの張りを感じていた。

大学で生物学を専攻し、卒業後もそのまま研究室に残るものと自他ともに認めていた真生子が、突如新聞社入りを志したのは、理科系の研究室での先輩たちのせせこましい息詰まるような人間関

係におそれを抱き、それよりも科学ジャーナリストとして広々とした世界を、それ長寿村だ、やれ珍しい蝶だと取材して歩きたいという、ごく単純な夢を追ってのことだった。それが入社以来、文化部のラジオ・テレビ欄担当として放送局回りをしたり、婦人部でファッション記事を書かされたりで、島ちがいの担当分野を二、三年ずつ経験し、それはそれなりに楽しい日々であったが、やっと三十一になって念願の科学部入りができたのである。

入社当時は化粧もせずに、お下げ髪にひらひらとリボンを結んで社へ通ってきて、男の記者連には「マシマロちゃん！」と可愛がられたものの、先輩の婦人記者たちからは「イモねえ。もう少しなんとかしたらッ。あなたも大東日の記者でしょ！」などとあきれられたほどの野暮が、今ではすっきりと肉もしまり、ニューヨークやパリにまで進出しているデザイナーが帰国した折に仮縫いしてくれたような服もさりげなく着こなして、中年肥りでもたついている先輩たちを羨ましがらせたりもしていた。

*

「今すぐ私どもの社で記事にさせていただく段階ではございませんが、松山先生のワクチンには私ども大変関心を持っております。ご研究の資料をいただき、動物実験や臨床の成果について長い時間をかけて追わせていただきたいと存じまして……」

「島田さん、アッ島村さんでしたっけ。実は、それは、私にとってもありがたいことなんです。もちろん、すぐ記事になれば多くの患者さんに試してもらえるということで、たしかにそれなりのメリットはありますが……、しかし例の風見ワクチンやT・O・Cのように学会で鼻くそよばわりさ

れるものと一緒くたに効いた効いたと書かれても、かえって心ある医師の反撥を買うばかりです。ぜひゆっくりと時間をかけて、私の研究を見とどけていただきたいと、思いまスッ」

探り当てたわずかな言葉を勢いこんで吐き出し、また考えこんではトトトトッと話す、今にも躓きそうな心許ない松山博士の口調は、胸に溢れる思いを言葉にしきれない素朴な人柄を感じさせた。

松山博士のワクチンは、もともと結核の治療のために松山が二十年あまり前に開発したもので、結核菌から抽出した成分を処理したという透明な注射液だった。このワクチンは、結核と共通の抗原物質を持ち、菌自体非常に似通った抗酸性の桿菌であるハンセン氏病にも効くことがわかり、なおその後、松山自身の言葉によれば、結核患者、ハンセン氏病患者にガンがほとんどないというところから、天啓のようにある日突然、このワクチンがガンにも効くのではないかと思いついたという。それから研究を重ねたが思うようにいかず、一時は研究も中止したりで十年ほどたち、実際にガン患者で試しはじめたのがこの五年間だということだった。

この日真生子を捉えたのは、松山博士のワクチンに使われる結核菌の株であった。試験管にはマジックインキで「青山株」と記されていた。その試験管の中には、一見モグサのような、あるいはオカラのような、白い、そして淡いクリーム色にも見える塊がモクモクと重なりあっている。

「この青山って、どういう意味ですか？」

真生子の質問に、松山の右腕と紹介された和田という、顔が髭に埋もれているような若い医師が答えた。彼は松山に呼ばれると、あわてて実験衣の下に筋目も消えかかったズボンを着けてその場

に加わったものだ。

「そう、その青山H・37RVという株、これはヒト型の結核菌の標準株です。少なくともこの十二年間はずっとここで培養されてきたもので、戦前からあったはずです。この一ミリばかりのコロニー（集落）に三十億から四十億の結核菌がいますから、ツベルクリン培地と同じ液体培地にこのコロニー一つを取って培養するとこんなになるんです。毒性がすばらしく強いんです。いまだにモリモリしてますよ」

「そんなに毒性の強いのをどうして？」

真生子の問いに、松山博士がよく聞いてくれましたとばかりに機嫌よく話を取った。

「ああ、同じ結核菌でもね、筋骨たくましいヤツと、ひ弱なヤツがあるんです。私はその毒性をすっかり処理してしまいますから、毒の強かったヤツほどその後にはワクチンとしてたくましく働くよい成分が残るんです。悪にも強く善にも強く。こうした処理にはまったく微妙なカンというか、デリケートな手仕事が必要なんです。まあ、このワクチンは私だけの秘伝の薬のようなものです」

真生子が、だれでも松山博士の処方どおり再現できなければ科学的に容認できないものではないかと尋ねると、もちろんだれでも博士の指示どおりにすれば作れるが、合成品ではない生物学的製剤なのだから、多少のちがいはあり得るのだという返事であった。

真生子は、子宮ガンの細胞として世界中の研究室で使われているヒーラ細胞が、二十年も前に子宮ガンで死んだ黒人女性ヘンリエッタ・ラックスの頭文字を取ったものだということからの連想で、なんとなく青山株を青山という人が持っていた結核菌というように想像してしまった。戦前か

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

らあったというからには、その頃そんな毒性の強い菌に冒された人は治療の方法もなく死んでしまったにちがいない。おそらく伝染病研究所にでも保存されていたものをわけてもらって、松山博士が培養を始めたのだろうが、この菌の持ち主は学半ばにして血を吐いて倒れた白皙の若者であったろうか……などと真生子は勝手に思い描いた。そして、彼の肉体を喰いつぶした菌が、こうして三十数年たった後も盛大に繁殖し、全国のガン患者の身体に注射されていく……。真生子は、人間のさまざまなあがきと絶望を呑みこんで過ぎてゆく時の流れと、その中であらゆるものに挑戦し宿命を克服しようとする人間の努力と英知に、ふと感慨をもよおし、思わずため息をついた。

「この青山さん、亡くなったんでしょうね」

「いやあ、それは知りませんがね」

真生子の質問がこの場の主題とは関係ない妙な方向へ飛んでしまい、松山博士は鼻白んだふうであった。真生子はあわててワクチンの製造法や治療効果についての質問を続けた。そこへ電話に出ていた和田が戻ってきた。

「先生、すごいですよ！　このあいだの東都新聞の人が、松山ワクチンのために文芸公論に八十枚書きましたからって。来週発売ですヨ。さあ、大変なことになるぞオ。どうです、東日新聞さんも早く書かないと、他に抜かれますよ！」

松山は当惑したようにパッと頬を紅潮させ、妙に鮮やかな薄紅色の唇をピクピクとふるわせたが、何もいわず、和田と真生子の顔を交互に見た。

「よかったですねえ、ああした雑誌にのれば評判になるでしょうから。このワクチンで救われるか

たもきっとふえるでしょう。来週ですか？　楽しみに拝見いたしますわ」
　真生子の言葉に、松山博士はほっと表情の色をやわらげた。
「東都の記者のかたも、今、自分とこの新聞で記事にするのは、いろいろな事情からむずかしいらしくて。それにページ数の関係もあって雑誌に書くことにしたらしいんです」
「四百字詰め八十枚といえば短い枚数ではありませんが、ずいぶん治癒例もあるわけですか？」
「私のワクチンの患者さんを、それはそれは遠くまで訪ねてくださいましてね。私も知らなかった治癒例まで集めてくださいました。わたしィ、感謝しているんです。私もその有効例を聞いて本当にほっとしました。絶対に効くという確信を持って全国の病院へこのワクチンの治療試験をお願いしながらも、正直いって本当に効いているのかなと、夜も眠れなくなる時があるんです。もう、心臓がキューンとしめつけられるようなこともたびたびです」
　ふと見ると、博士の机の向こうの板壁に「Ich kann auch in einer Scheune arbeiten」と書かれている。たしかノーベル賞か何かの学者の言葉だったと思われたが、「物置の中でだって研究はできる」――その言葉からは、ひどい環境の中で何十年自分をはげましながら研究を続けてきた松山博士の強靱さと、この人の中で抑えに抑えているであろう叫びのようなものが聞こえてくるような気がした。
　これからも時々訪ねることを約して、蒸風呂のような研究室から表へ出ると、まだ日は高かったが、わずかな夕風が快かった。
　このへんは坂の多い街だが、病院も複雑な斜面に建っていて、表通りに面しての一階は、裏側で

は地下に埋もれ、また場所によっては、坂道の中途に半分のぞいたガラス窓の下に実験室があったりした。錆びついた古ベッドの金属枠だけを外からそのままぶちつけた窓も並び、改築のはかどらぬ様子が裏側からはまざまざとうかがえた。

昭和二十二年、中央医大の全員が集団疎開先の山形と福島から戻ってきた時、先々代の学長はこの戦禍の土地に立って「中央医大ももう終わりだ！」と慨嘆したという。

その頃、松山瑞穂は四十代、まだ教授になったばかりであった。その後松山教授は、私立中央医大の生き残る道として、医学部を持たない私立城北大学に合併させる案を実現させるために熱心に動いたという。しかしそれはのちのち、彼自身学内の権力を握りたくてやったことだと反対派から追求され、今から十数年前、学内ですっかり孤立させられるもとになったという噂もあった。ヒメジョーン、通称貧乏草の咲く裏の空地に立って見回すと、デスクの北沢から聞いていたそんな古い話もなんとなく納得できるような気がした。

今会ったばかりの松山博士のあの弱々しげな風情と、それだけの思い切った行動力とは、真生子の中でまだうまくつながらなかった。しかし、そんな昔のことがいまだにあとを引くものであろうか。いったい、それからの十余年をあの人は学内でどんな立場に立たされてきたのだろう。ともかくあの人は、その頃からずっとあのワクチンだけをいじり続けているのだった。

少なくともあの人は、新薬というとよく話題に上るようなヤマ師的な人物ではない。ガンというもの自体どうして発現するものか世界中でまだまったく不明の現在、なぜ効くのかの説明があの人にできないのは当然で、思いつきや当て推量で、有効の機序の解説など、しないところがかえって

好感が持てる。真生子がさきほど、次の部屋にちらりとのぞいたマウスの姿を見て動物実験の結果を問うた時も、「どうも惨めな結果ばかりで……」と答える博士の表情があまりにも苦しげで、真生子のほうまで辛い気持ちにさせられたのだった。

ずっとワクチン一筋に生きてきたあの白髪の老学者が、どうか生きているうちに報われてほしい……、真生子はそう思いはじめている自分に気付いて、ふとにが笑いした。「甘いぞ！　科学部の記者がいちいち同情していたらどうなるのだ。よい人だから優れた薬を作るというわけではないんだ！」

しかし、この日、初対面の松山博士が真生子の中にさわやかな印象を刻みつけたことは、たしかであった。

＊

中央医大からは、街並の屋根の向こうに、こんもりと深い緑に包まれた国立本郷大学の建物が望まれた。

戦後まもなく、中央医大はもう終わりだと嘆いた時、松山博士らは焼け残った本郷大学をどんな思いで眺めやったことか、などと考えながら、真生子は追分の通りの裏道を抜け、本郷大学農学部の脇を通って、医学部の研究棟まで歩いてしまった。「真生ちゃんって、文字どおり風を切って歩くんだね」とよく同僚の記者たちにひやかされる早足で、中央医大を出てから二十分たらずであった。

このところ毎週土曜日の午後には、本郷大学医学部第四内科の渡辺教授のところへ原稿をもらい

にくるのが、真生子の仕事の一つであった。

渡辺教授は専門以外にも文学や心理学への造詣が深く、東日新聞に週一回連載している人間の身体の仕組についての解説は、縦横に筆が走り大好評であった。しかし多忙をきわめる渡辺教授である。土曜日は外来患者の診察を終えたあと、二時から一時間半ほど自由な時間があるというので、原稿は土曜の夕方受け取りということに決めたが、データの詳細の書き込みや資料の付き合わせまでは無理なので、それらは真生子が教授の教室の助手の倉科武史にたしかめながら、素人にわかりやすい言葉で書き加えたり訂正したりすることになっていた。

土曜日のその時間には研究員も職員も帰り、構内の電話の交換まで切れてしまって、倉科は電話のベルも鳴らない研究室にひとりポツンと残っていた。真生子が気の毒がると、「どっちみち、だれかが残っていないと、実験のほうに支障をきたしますから……べつに原稿のためではありません」と倉科は言い、実際、タイマーが鳴るたびに、実験機器の間をすらりとした身体を斜めにして走り回っていた。

真生子が研究室の重いドアを開けると、器具のかげから倉科が笑顔で立ち上がり、いつものようにドアの裾にバケツを置いて、ドアを半開きに固定した。人気のない構内で女性と二人きりということで気を使っているらしかったが、留学生活の経験もある倉科には、そんな動作が自然に身についていた。

「遅くなりまして」

「いいえ、ご連絡いただいてスケデュールを入れ替えておきましたから。それに、どうせ夜中まで

この部屋を離れられないんです。松山先生のところはいかがでした？」
真生子は手短かに先ほどの取材の印象を話したあと、
「お時間がおありでしたら、あとで先生のお考えも聞かせていただきたいですわ」
そう言って、すぐに本題の仕事に取りかかった。
いつも原稿以外の話はいっさいしないのだが、教授の原稿に一行手を入れるのにも、自分の専門外のことには臆病なほど神経質な真生子は、徹底的に基礎から倉科に説明してもらうので、かなりの時間がかかった。真生子は、倉科が真生子に完全に理解させようとする時の、真剣でしかもその自信から生まれるやさしさに満ちたまなざしがこころよくて、質問をするのが楽しみでもあった。
倉科武史は真生子より三つ四つ年下であったが、渡辺教授の話では、もう四年も前に結婚しているということであった。渡辺教授は早く亡くなった倉科の父、そして現在都内で病院を経営している倉科の妻の父と、旧制高等学校時代の級友という間柄で、武史の仲人でもあった。
実は武史の母が、若い頃は何度かステージに立ったこともあるピアニストで、夫亡きあとはピアノを教えながら女手一つで息子を育てあげたのであったが、そのいちばんお気に入りの弟子として小さい時から手をとって教えてきたのが、現在武史の妻となっている倉科マリエであるという。彼女は新進ピアニストとしてすでに楽壇にも名を馳せ、その名前は最近の東日新聞の文化欄にも登場することがあった。
「この先生、研究と本にしか興味がなくてね。ところが、この一見クールでやさしい雰囲気が、女の子にはいいらしいんだな。いまだに独身と間違えられて、よくもてるんだ。ぼくはジェラシーと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com